

第 66 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 特賞

東京都立三鷹中等教育学校 3 年

飯坂 太一

課題 ①

あなたが考える国連加盟 70 年を迎えた日本の使命とこれから。

副題

なし

本文

①

「どうして日本では、みんなと同じであることが大切なのか。」

ニュージーランドを学校の代表団リーダーとして訪れた際、現地の生徒から尋ねられたこの純粋な問いは、私の痛いところを突いていた。当時の私は、意見が割れたときはうまくまとめ、「波風を立てないこと」こそがリーダーの役割だと信じ切っていたからだ。

その夜、私は一人で考えた。「空気を読む」という言葉があるように、私も周囲と違う意見を口にするのをためらっていた。けれど、それが本当に「和」なのだろうか。「和食」などの「和」という字は、果たして「違いを消し去る同調」を意味するのだろうか。

答えは翌日の対話の中にあった。社会問題について現地の生徒たちと議論した際、彼らは意見をはっきり述べ、真正面からぶつかり合った。「空気が悪くなる」と焦る私をよそに、議論が終わると彼らは

「その考え方は面白い。」

と笑顔で声を掛け合っていた。意見が違うことは、相手を否定することではない。違うからこそ「なぜそう考えるのだろう」と耳を傾け、自分だけでは見えない景色に気づける。真の「和」とは波風の立たない静けさではなく、波風が立っても互いに向き合い続けられる強さだと気づいた。

この教室での小さな気づきは、世界という大きな舞台にも通じている。日本は一九五六年に国際連合に加盟し、二〇二六年で七十年の節目を迎える。国連に集まる国々は歴史も文化も、国益すら異なる。すべての国が同じ考えになることなどあり得ない。それでもなお、同じテーブルにつき対話を重ねることこそ、多国間主義の本当の意味がある。

これまで日本は、西洋と東洋、先進国と途上国の間で「橋渡し役」を担ってきた。自国の正義を振りかざすのではなく、「人間の安全保障」のもと、命や尊厳を守る草の根支援や防災技術の共有など、現場に寄り添う貢献を続けてきた。また唯一の戦争被爆国として、対立が深まる世界の中で粘り強く平和を訴え続けている。戦争や貧困、気候変動など正解のない課題に向き合う今、求められているのはこの日本の姿勢である。

加盟七十年を迎えた日本の使命は、世界を一つの考えに染めることではない。違いを尊重し、対

立する国々の間に立って「対話し続けられる場」を守る触媒となることだ。

「和」という言葉を、周囲に合わせる免罪符にしてはならない。自分の考えを持ちながら、相手の考えにも真摯に耳を傾ける。その両輪があってこそ本当の「和」は生まれる。そしてこれは国家間だけでなく、私たち中学生の日常にもつながっている。国際理解とは特別な人の仕事ではない。教室で友達の意見を聞くことや、異なる文化を持つ人の声に「なぜ」と立ち止まること。その日々の実践の延長線上に、世界の平「和」はある。

かつての私は、対立を避けることだけがリーダーの役目だと思っていた。しかし今は違う。本当のリーダーとは波風を消し去る人ではなく、波風の中で対話を紡ぐ人なのだ。七十年前、日本は国際社会の一員として新たな一歩を踏み出した。これからの七十年を紡ぐのは私たちの世代である。日本が「世界を一つにする国」ではなく、「違う世界が出会い、ともに未来を創る国」であってほしいと私は願う。

ニュージーランドで出会った「違い」は、私に「和」の真の意味を教えてくれた。だからこそ私はこれからも違いを恐れず、違う声に耳を傾け、新しい答えを探し続けたい。

「波風の立たない世界」を夢見るのではなく、「対話から和が生まれる世界」を創るために。それこそが、国連加盟七十年を迎えた日本から、次の時代へと手渡していくべき確かなバトンである。